

投稿

学生自身の企画・運営による
メディカルインタビュートレーニング

加藤徹男 (宮崎医科大学5年・MIT 実行委員長)

基本的臨床能力の習得をめざした新しい医学予備教育が全国に展開される中、私たち宮崎医科大学有志も模擬患者(SP)の方や民間病院の先生方にご協力いただいた「Medical Interview Training (MIT)」を開催しています。
まず、MIT開催の契機となった「医療面接体験学習会」から紹介させていただきます。これは昨年12月に「模擬医療面接」を学内に初めて紹介する目的で私たち学生が主催したもので、京大総合診療部の福井英次教授をお招きして「医療面接」とそのトレーニングの重要性を紹介していただき、実際に学生数人がSP(黒岩かをるさん・九州山口SP研究会代表)と面接を試み、フィードバックを受けるというものでした。患者さんとのコミュニケーションのとり方や関係の築き方を学ぶ場としてはもちろんのこと、患者情報収集能力や診断能力向上のために模擬医療面接が優れた訓練方法であることを、学生が初めて認識する機会となりました。

宮崎医大5年生25人が
共通の問題意識から企画

MITは「医療面接体験学習会」の好評を受けて宮崎医大5年生25名により企画されました。参加型の実践的なトレーニングをめざし、コミュニケーション・共感能力、患者情報収集能力、病歴からの鑑別診断能力の向上をMITの3つを大きな到達目標としましたが、背景は以下のような学生生活共通の認識としてありました。
①患者さんとのコミュニケーション、信頼関係についての、ペックサイドでの課題認識を痛感することが多いが、教育目標化され



●観察した面接について分析する学生たち

●一般病院だからこそ貢献できることがある

菊川 誠 (宮崎生協病院内科・MITシナリオ作成者)

今回、MITにシナリオ作成で協力させていただきました。
私たちの病院は、民間医大加盟し患者さんとの共同の営みとして最前線の医療を展開しています。そこで取り扱われる疾患は多岐にわたりますが、今回は教育的配慮からコモン・ディズナスを中心にシナリオを作成しました。

患者さんから学ぶことの大切さ

また、患者さんはそれぞれの社会背景を持っており、それが疾患と密接に関わっている場合が少なくありません。今回のMITが単なる疾患当てゲームにならないよう、



●参加者が観察する中で行なわれた学生の面接

指すとは言いにくい、十分かつ具体的な指導を得られにくい
②各疾患についての検査や治療などの知識を中心に学ぶことの多い現カリキュラム(疾患の鑑別学的学習)では、症状に関する情報や検査プロフィールをも十分に引き出し、それらの情報から類似の疾患を鑑別するという思考プロセス(疾患の横断的学習)が身につくにくい

症候から鑑別診断を学ぶ

トレーニングの効果を高めるためにMITを全3回のシリーズ(循環器系・呼吸器系・消化器系)とし、5月より毎月1回開催することになりました。また各MIT前に学習会を開くこともしました。

「前年学習会では各器官系由来の症候から担当を決め、「臨床入門 臨床実習の手引」(福井次夫、医学書院)で推奨されている

- ・Location
・Quality
・Quantity
・Timing
・Sequence
・Fact or Fiction
・Associated manifestations
- という病歴情報収集項目に沿って、具体的な質問を作りながら症候からの鑑別診断を学ぶという方法をとりました。なお、mailing listにSPやドクターを含む全参加者を登録し、随時ネット上で議論のやり取り

患者さんの背景を十分に引き出してもらうべく留意しました。
MIT当日には、地域住民の方々に参加していただき、患者さんの立場からのコメントもいただきました。
それらの熱心なアドバイスに対して真剣に耳を傾け、目を輝かせてうなずく学生の姿を目にして、MIT作成者という形で参加させていただけた喜び、生協病院としても前向きな地域住民の方々の存在の大きさ、ありがたさをあらためて実感するとともに、一般病院だからこそ、学生の学習に関与していただくことがあるのだと確信しました。

り情報交換できる環境を用意し、活用されてきました。

市中病院の医師、
SPらが協力

患者背景の設定とともに、ある医学的整合性の下、鑑別すべき疾患が多数示唆される「構造化」されたシナリオとフィシリターへの確保が学生主催のMITでは重要だったわけですが、前者については宮崎生協病院の菊川誠先生(下記参照)とSP黒岩さんの全面的な協力を得られ、全シリーズ、計6つのシナリオを共同制作していただきました。また当日は、川崎医大総合診療部で学ばれた鹿島生協病院の吉見大祐先生(下記参照)にフィシリターとしてご参加いただくことができました。

なおシナリオ制作には、佐賀医大総合診療部の大西弘高先生に教育的側面から助言をいただく幸運を得ました。この他、当該器官系の面接役には指名されない学生もシナリオを確認する手続きをとり、学生自身の視点をも学習アトに反映させていただきました。

学生主体の学習だからこそ
得るものは大きい

参照原を誦うMITの運営面に関しては、当番制で学生自身がホスト役となり、面接役も学習会で担当した器官系以外のテーマの際に、直前にしり引きで選ぶという方法を採用し、各参加者が緊張感の中で取り組まざるを得ない環境を作り出しました。

●学生よ、いまこそ磨け！
コミュニケーションスキルを

吉見大祐 (鹿児島生協病院内科・MITファシリテーター)

現在の研修医はほとんどの場合、基本的臨床能力である、医療面接を中心としたコミュニケーションスキルをトレーニングされないまま、卒後には臨床現場に放り込まれ、患者さんとのコミュニケーションをとってよいが、四苦八苦しているが現状です。どうしても研修医の時期は各種知識・技術の習得に重点が置かれてしまします。したがって患者の気持ちに近い、医師の立場に寄り添ってほしい時期である卒年に、医療面接を中心とするコミュニケーション技術のトレーニングを受けることが大切だと思います。

臨場感あるシミュレーションで
アートを学ぶ

第1回MITに参加する前には、車直に言って医療面接のうち正確な情報収集・鑑別診断を進めるといふ側面(サイエンス)に偏りやすくなるのではないかと、もう一方の側面である、患者さんとの信頼関係を築きながら診察を進めるといふ側面(アート)が弱く



●患者や看護婦も参加し、学生にフィードバックをした

た。
また、面接の振り返りにはフィシリテーターとSPに加え、宮崎生協病院の他の医療職の方々や実際の患者さんにも参加していただき、より広い視点から患者さんに向き合うための「気づき」を得る努力をしていきます。特に患者さんとの議論を通して、患者共感的な対応の仕方や面接の進め方を、さらに読解力をもって習得できたのは実に大きな収穫となりました。
「現カリキュラムでは、十分に体験することが困難な模擬医療面接をぜひ」との思いから皆で始めたMITですが、自ら模索して築き上げてきたので、得たものも大きいような気がしています。MITに終わることもなく、今後ともさらに臨床現場を磨く学生主体的な学習法をめざしたいと考えています。

●第2回東京SP研究会セミナー
参加者募集 締切=7月31日

8月5日/東京

第2回東京SP研究会セミナーが、きたる8月5日に、東京・豊島区の池袋保健所において開催されます。これに伴い事務局では参加者を募集している。詳細は下記にて。
▶プログラム
SP(模擬患者)との医療面接実習
▶対象：医学部4-6年生、初期研修医
▶参加費(定員)：2,000円(10名)
▶連絡先：〒171-0031 豊島区目白5-16-13 佐伯晴子方 東京SP研究会事務局
☎&FAX (03)5398-7172
E-mail: harutksp@f1.dion.ne.jp



●学生の議論に加わる黒岩かをるさんと吉見大祐氏

なるのではないかと危惧していました。
鑑別力を感じる思惟がながら、臆とる様状など正確な情報もれなく聞き出し、緊急度・重症度・頻度などに基きき別断を進めたいという実感を診察を通じて得られたシナリオとSPを役として、臨場感・緊張感を持つてコミュニケーションしたことは、患者のサイエンスの能力を高めたいというニーズに応え、学習意欲を高め、アートの能力も十分学べると。

■よりよい医師-患者関係を築くための「面接法」を豊富な実例で解説

医療面接法

よりよい医師-患者関係のために
The Medical Interview: Gateway to the Doctor-Patient Relationship, 2nd ed.

新刊

著 C.Knight Aldrich
訳 田口博典 高橋英二 第2版 300頁 教科書
¥5,184 2000
定価(本体2,000円+税) ¥4,000
(ISBN4-262-13855-9)

基本的臨床能力の一つとして欠かすことのできない医療面接の技術について、臨床現場から得られた多くの実例をもとにまとめた解説書。基本となる技術をはじめ、無口な患者や病歴が患者への対応、患意の察知、怒り、希望をどうよに扱うかなど、臨床経験豊かな著者がわかりやすく解説。OSCE(客観的臨床能力試験)対策にも有効。

■神経内科患者への対応・面接の技法をわかりやすく読め

神経内科の外来診療

医師と患者のクロストーク

新刊

北野邦孝 脳神経内科医
¥5,184 328 2,000
定価(本体3,800円+税) ¥4,000
(ISBN4-262-11846-3)

「よくみる神経病棟」の症状と診断・治療について、患者の訴えを聴きつつ、合理的かつ患者に納得のいくまで説明する前例のない本。若い医師や研修医が苦手な患者への対応や面接の技法をわかりやすく読め。外来診療を通じて患者との対話で行う臨時的な試みといえよう。